

政治経済的地域統合研究会 | 議事録

【日時】2018年9月28日（金）13：00～16：00

【場所】千葉大学西千葉キャンパス 文学部・法政経学部1号館101教室

【出席者】畑佐伸英先生（名古屋経済大学経済学部 教授）、石戸光先生（千葉大学大学院社会科学研究院 教授）、池田明史先生（東洋英和女学院大学 学長・教授）、松尾昌樹先生（宇都宮大学国際学部 准教授）、落合雄彦先生（龍谷大学法学部 教授）、水島治郎先生（千葉大学大学院社会科学研究院 教授）

国と国との関係性

比較優位：自分の国が持っているメリット、特徴、有利な点

マクロ：全体 メソ：国家の中の団体 ミクロ：個人

【セッション1：アジア太平洋】

■畑佐伸英先生「アジア太平洋地域を事例とした学理の検討」

APECとTPP

東南アジアにASEAN設立、欧州ではEUが確立、日本は高度成長期。

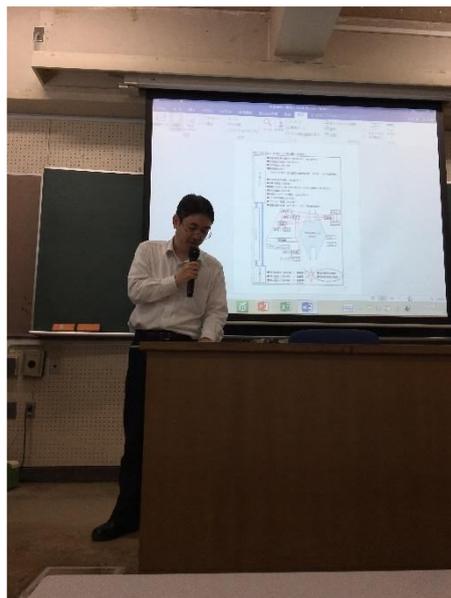
1980年代の東南アジアは貿易投資の時代。

PECC（産官学）の設立。

TPPの前にTPSEP（Pacific4協定）が設立されていた。

世界金融危機の影響で、オバマ政権誕生時は「経済優先」。

アジアに投資をしてアメリカの経済を発展させるため、アメリカはTPPに署名。（トランプ政権誕生後、すぐにTPP離脱）



■石戸光先生「東南アジア地域を事例とした学理の検討」

マクロ的な国際関係が分断になっている。（領海・領有権を主張）

ASEAN Way：全会一致原則

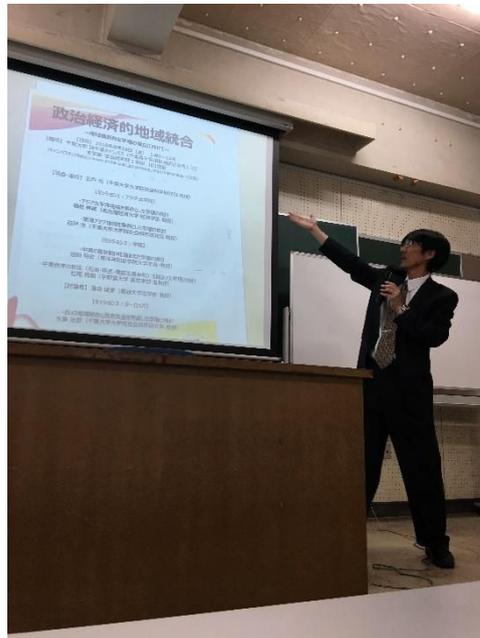
地域（ミクロ）の問題から世界（マクロ）の問題へ。

ソシオン⇒ソーシャル（社会的）なニューロン（つながり具合）

ソシオンとは「敵対視」の表現。

「韜光養晦」...「才能を隠して、内に力を蓄える」という中国の外交・安保の方針。大きな国の中国は目立たないように外交で交渉していくという姿勢の意味。

2000年から、中国・米国の介入でASEAN10カ国間の分断が始まる。



【セッション2：中東】

■池田明史先生「新型紛争類型としてのシリア内線の現況」

主体と状況と行為という視点。

昔の時代とは異なる考え方が求められているので、学理という視点が求められる。

「アラブの春」⇒民主化の台頭。

軍事的決着の要因⇒ロシアの軍事介入・反対制陣営の分裂・反体制側に対する国際的支援の機能不全（誰をサポートすれば自分たちの国益になるのか分からなくなった）

イランの国際的孤立の脱却には、イラン＝イラク＝シリア＝レバノンの「シーア派回廊」が必要。



◆討論、コメント：落合雄彦先生／池田明史先生

キーワードは「地域と統合」、「地域と関係」。

統合は関係と読み替えてもいいのでは。

地域は作られているものではあるが、同時に作っているものでもある。

日本は新しい（人工的な）地域概念を作っている。

人間は「関係」で生きている。我々は関係を学ばなければならない。

ロシアの今後の中東に対する影響⇒軍事力

中東の内戦のメリットは、武器が簡単に手に入ること。

中国の中東における影響力を日本は知らない。中国のアフリカ（ジブチ）への進出。

中国は今までは「中東で商売はするが政治には介入しない」という姿勢だったが、最近に変化しつつある。



■松尾昌樹先生「中東秩序の形成（石油・移民・権威主義体制）を踏まえた学理の検討」
中東では労働力の大多数が移民から成り立つ。
バハレーンでの反体制運動があっても政府が倒れることはなかった。
国家が非税収入を多く獲得することにより、財政赤字がない。
エスノクラシー：民族統治、移民と国民の間の格差を保つ
国民と移民の格差は、労働環境（賃金や職種など）で比較的簡単に見ることができる。
カタールでは全国民の46.13%が専門職になる。
エスノクラシーの失敗：専門職でいい思いをしているバハレーン人のツケを、下層労働をしている一部のバハレーン人が払っている。



◆討論、コメント：落合雄彦先生／松尾昌樹先生

欧州における移民のイメージは「移民排斥、悪いイメージ」であるが、中東での移民はあくまで労働力。

エスノクラシーは欧州では差別の意味合いが強い。

アパルトヘイトは分業でもある。

選択的移民制度⇒アセットを提供してくれない移民は自国に帰ってください、という意味。

【セッション3：ヨーロッパ】

■水島治郎先生「EUの地域統合と西欧社会を考慮した学理の検討」

北欧～英～伊～アジアに混迷が広まっている。

ヨーロッパでは、中心との関係性が重要であった。

欧州の各都市に「ローマ（マイクロローマ）」が普及していった。

ドイツの王様⇒神聖ローマ皇帝になることで自らの正当性を保持。

中世から近代へ「首都という中心」を確立していった。

宗教的・文化的自立⇒宗教改革は各国・各地のローマからの自立。国家の中に宗教を囲い込んでいく。また、今まで方言の存在であった言語を、ラテン語に代わって「国語」とした。

近代国家の自立は、単なる自立だけではなく、各国を飲み込んでヒエラルキーを作っていった。

